物語でなくとも教訓

南三陸 語り部ガイド研修会

教訓を伝える大切さを再認識した研修会

東北観光推進機構など主催の語り部ガイド研修会が14日、南三陸ホテル観洋で開かれた。東日本大震災の被災地で語り部活動などに取り組んでいる人たちが集まり、後世に教訓を伝えていく大切さを再確認した。

機構と宮城、青森、岩手、福島4県、仙台市が観光復興対策事業として開いており、3回目。南三陸町では初めて開かれた。地元をはじめ、県内、青森などから観光ガイドや語り部約40人が参加した。

講話した東北大学災害科学国際研究所の柴山明寛准教授は、教訓のとらえ方について、「それぞれの体験談が教訓かどうかを多角的に見る必要がある」と指摘。「奇跡的な体験談は感動するが、物語にならないことが教訓になることがある」とアドバイスした。

通訳案内士の佐竹深雪さん（仙台市）は、被災地の語り部について「観光地の語り部と違う点は、悲劇の場に立ち続けているということ。目に見える形でのサポートが必要」と提言。「伝えていく上で大切なのは、100年後、千年後に残すという視点ではなく、震災と同じことがあすにでも起きたらどうするべきかを考えることだ」と語った。

南三陸ホテル観洋が継続している語り部バスの紹介や乗車体験もあった。

気仙沼市内で語り部活動を行っている70歳の男性は「震災から時間が経過し、風化を感じる。過去に襲った津波の歴史も踏まえながら、命を守ることの大切さを伝え続けていきたい」と話した。

2018年9月15日
【三陸新報】